

# 増えるパーキンソン病

パーキンソン病という病気の名前を聞いたことのある方は少なくないと思いますが、どんな症状の病気かとなると想像しにくい方も多いかもしれません。病名は英国の医師ジェームス・パーキンソンによって記載されたことに由来します。難しい印象をいだかせますが、確かに厚労省の指定難病の一つです。

その症状は代表的なものには、手足のふるえ(振戦)、動作がゆっくりとしかできなくなる(動作緩慢)、筋肉が硬く曲げ伸ばしがしにくくなる(固縮)などがあります。姿勢は腰が曲がったように前かがみとなり、歩行はしばしば小さな歩股で少しずつ進む感じになります。しかしこのような目に見える体の動きに関する症状ばかりでなく、便秘や頻尿、うつ、時には認知症などを伴ってくることもあり、症状はかなり多様です。このためパーキンソン病ということがわからないままそれぞれの症状に関連する診療科に通院しているケースも時に目にします。



※パーキンソン病の姿勢

何ともつかみどころのないこの病気は、実は決して珍しい病気なんかではありません。むしろよく見かける病気といってよく(特に高齢者)、しかもパーキンソン病は近年増えてきていることが判明しています。米子市における経年的な疫学調査では、人口 10 万人あたりの粗有病率(実患者数を人口 10 万人あたりで表わした値)は 1980 年 80.6 であったのに対し、1992 年は 117.9、2004 年 177.4 と増加が明らかでした。この理由として考えられるのは、①高齢者の増加 ②診断技術の進歩 ③治療の進歩による患者さんの寿命の延長などが考えられています。まだ発症の原因は不明であり予防法も確立されたわけではありませんが、さまざまな治療薬が開発されてきており、早期に治療介入を開始することがその後の経過にも好影響を及ぼすと考えられます。

超高齢化社会を迎え、これからの時代パーキンソン病は確実に増えて行きます。脳の病気は、ついつい脳卒中やアルツハイマー病などばかりに目が行きがちですが、パーキンソン病は患者さんの生活の質や家族の介護負担などにも大きな影響を及ぼしうる病気です。この病気に対する社会的理解が深まっていくことが望まれます。



【神経内科診療部長 大塚 真】

